

課程博士の学位授与申請に係わる審査報告書

学 籍 番 号	18DC1502
氏 名（本 籍）	林 涛（中国）
学 位 の 種 類	博士（学術）
報 告 番 号	甲 第 113号
学位授与年月日	2021（令和3）年3月20日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
論 文 題 目	観光のまなざしと東アジア、中国人インバウンドのジレンマ

審 査 委 員

主査 黄 英哲



副査 松岡 正子



副査 唐 燕霞



副査 周 星



2021（令和3）年2月5日
愛知大学大学院中国研究科

林涛博士学位請求論文審査報告書

題目：観光のまなざしと東アジア、中国人インバウンドのジレンマ

【審査結果】

2020年10月23日、主査黄英哲、副査松岡正子・唐燕霞は予備審査を完了し、本審査への移行を可とする決定を行った。

2021年1月26日、林涛本人に対する口頭試問を、愛知大学名古屋校舎M406教室において主査黄英哲・副査松岡正子・唐燕霞・周星計四名によって行い、その結果、課程博士学位授与の要件を満たしていることを確認し、博士学位授与を相当とする。

【審査要旨】

本博論は、観光人類学というアプローチから観光活動の構成者である「ゲスト」と「ホスト」の関係を探る論文であり、「中国人インバウンド」の東アジアでの観光進出にスポットライトを当て、特に日本と台湾における、観光活動を通して築き上げた現地社会との関係に關して研究する論文である。

本博論は、序章、第一部（見ると見られる）、第二部（原動力と制動力）、終章、付録の五つの部分から構成される。

序章は、まず、日本のインバウンド事業の状況（特に2003年の小泉政権時の「ビジット・ジャパン・キャンペーン」以降）と中国人観光客の世界への進出状況に關して説明する。そのうえで、日本政府の促進方針と違い、日本の世論におけるインバウンドへの冷ややかなまなざし、またインバウンド側からの主張の不在を問題として提起する。

第一部（見ると見られる）は、タイトル通り、主に観光に訪れるゲストと受け入れる側のホストの間にある観光の「まなざし」を中心に論じる。お互いにどのように相手を見ているのかをメインに分析する。観光のまなざしの特徴として、各章で「逆植地的」や「真正性」、「二次加工性」、「経路依存性」などの側面を指摘する。第一部は以下の五章から構成される。

第一章は、日本の民泊問題から外国人観光客へのまなざしを扱う。外国人インバウンドが激増するなか、日本の観光現場には多くの衝突が起きている。「民泊」問題は、その中の代表的な事象の一つと言える。この複雑な問題をめぐって、日本政府や民泊事業参入者、各自治体、また世論はそれぞれの立場から問題への態度を示している。その態度の開きは大き、「民泊」問題を日本の観光産業の「おもてなし」の真義を問われる事象にまで発展させた。本章は、「民泊」政策をめぐる各勢力の動きや、日本の民泊の歴史を振り返りつつ、マスコミで報道されている訪日外国人観光客というゲスト側の問題の他に、ホスト側としての日本社会にも不十分な点があることを指摘した。

第二章は、名古屋城の観光現場というホスト側から見る中国人観光客へのまなざしを扱う。本章は、筆者が名古屋城本丸御殿の案内係として勤務したなかでの体験と職員への聞き取り調査に基づいて、名古屋城のインバウンド対応を検証した。主に言語対策と中国人

観光客に向けた「逆植地的なまなざし」に関して観光人類学のアプローチから論じた。

第三章は、本土中国人の金門島ツアーから見る相互のまなざしを扱う。本章は、「冷戦の島」と呼ばれる金門島における本土中国人インバウンドを対象として、「観光の真正性」のアプローチから相互のまなざしを確認する。中国本土ではなかなか見られない伝統的な「真正性」のある観光資源が中国本土からの観光客の関心を引いたのではないかとする金門住民の予想に対して、多数の中国人観光客は「祖国の一部である金門の地を踏む」という気持ちを持っているという両者の想いの違いの間には、「真正性」についてのずれが読み取られる。ネット上、特に台湾本島の観光客からの間で物議を醸している、獅山防塞の「砲弾発射訓練パフォーマンス」が台湾人以外の人々によって演じられているという事実に対しての「真正性」について、検証した。

第四章は、世界遺産白川郷を訪れる台湾人観光客へのまなざしを扱う。白川郷の観光現場で確認できた、日本人観光客および住民と台湾人観光客の間にあるお互いの印象評価のギャップについて取り上げる。それらの分析から、観光の「まなざし」の「二次加工性」と「経路依存性」という特徴があることを指摘し、人類学の角度から世界遺産をめぐるホストとゲストの関係について検討した。

第五章は、中国大陆と台湾における日本植民地建築へのまなざしを扱う。諸方面ではとても似ている大連日露監獄と台湾嘉義旧監獄。この二つの刑務所遺跡の比較を通して、中国本土と台湾において、日本植民地建築の観光開発と利用の違いを明確にする。日本植民時代に対する歴史認識の違いから、二つの刑務所遺跡の観光運営方式、見学者の評価、まなざしなどの各方面で違いが生じた。そこで、大連日露監獄からみるナショナリズムも、嘉義旧監獄からみるノスタルジアも、本質は政治権力の代理表象であり、同じ歴史事実に対する、中国本土政府と台湾政府という二つの「権力」の違う解釈であると結論付けた。

第二部（原動力と制動力）は、観光のまなざしが文化交流に与える影響をプラス作用とマイナス作用に分けて論ずる。第一部は、観光のまなざしの状況や特徴に関して詳しく論じ、第二部は、それらをふまえて、ゲストとホストの間に存在する観光のまなざしがいかに「力」となり、文化の交流への「原動」と「制動」という両面にの影響を与えるかを検討した。第二部は以下の三章からなる。

第六章は、力の主体である日中台三地域の観光行政体制の比較を扱う。三つの政権の観光行政の構成と変遷に関してまとめる。また、各時期の三つの政府の観光政策や主な出来事に関しても詳しく整理した。観光のまなざしの影響力を議論する前提としての必要不可欠な背景を明確にした。

第七章は、中国の歌曲に表現された「旅」に関する歌詞の変化から、観光がおよぼすプラス作用について論じる。中国トップ音楽サイト「網易雲」で配信されている約40万曲の中国語曲を対象に、パイソンソフトで行った調査の報告である。1970年代から2019年までの歌詞に反映された中国人の旅の変容や、中国語曲の中の日本に対するイメージを分析した。さらに、異なる文化を持つ人々の持続的かつ直接的な接触による互いの文化の変

容、即ち「アカルチュレーション」理論のアプローチから、観光交流が如何に中国人観光客の「文化」（具体的には歌詞）に影響を与えたのかを指摘にした。

第八章は、台湾観光から見る観光の政治的マイナス作用を扱う。台湾と中国大陆の観光産業の歴史展開から、両者に高い政治性が共通することを指摘した。そして、台湾海峡兩岸の観光交流をめぐる政治的動向をまとめ、政治介入ができる法的仕組みを分析し、政治介入が現在の兩岸の観光交流の新しい壁を作り出したという結論を得た。

終章は、以下のような結論に至っている。近年、中国をはじめとするアジアの途上国の海外旅行の興隆により、かつて先進国の観光客による途上国への観光活動を土台として発展してきた「観光のまなざし」理論は、実践応用の限界を露呈している。その逆パターンであるアジアの人々による「先進国」への観光進出も、今後、観光研究において急務のテーマとなっている。観光は、文化交流の促進的な作用が多く見られる反面、時には異なる文化の間に立ちはだかる壁にもなる。真正性の認識などでの調整を含めて、いかにその制動力をうまく原動力に変えることができるかが、今後の観光交流の課題になる。

本博論において評価に値する点は、以下の通りである。

①これまでのまなざし論の応用は、先進国の観光客から途上国の住民へ向けられたまなざしに集中してきたため、どうしても偏りが生じると執筆者は考えている。近年、中国などのアジア諸国の経済発展により、かつて「観光される側」であった「東方世界」の人々も西洋の地を踏み、「文明」側の座に居座り続けた西洋の世界にまなざしを注ぐことができるようになった。なかでも、中国人観光客の増加が最も著しく、人数の多さから「東方世界の大反撃」とも言えるような激動である。本博論は先進国日本におけるアジアからの観光客に関する、見られる側から見る側に変わった人々についての研究であり、まだ蓄積が少ないこの視点からの研究を拡充させる意義は大きい。

②まなざし論を応用をする際に、特に中国人インバウンドの激増と東アジア途上国の人々による観光の発展という実情に合わせて、まなざし論の拡充、さらなる展開のための試みを行った。まなざしには、「二次加工性」と「経路依存性」という特徴があることを指摘し、「観光の逆植民地的なまなざし (Ob-colonial gaze)」を提示した。これはかつての研究の中では、気づかれていない点、あるいは気づかれたが、まだ学術的に正式に確立されていない点でもある。本博論に加えられた新しい知見といえる。

③これまでの中国人研究者による観光研究は、中国人観光客自身への研究に集中し、アウトバウンド旅行の目的国（地域）現地住民の評価を踏まえた研究が著しく欠如している。本博論は、現地（観光目的地）に住む中国人研究者の強みを生かし、両サイドの意見をより平等に扱う試みを行ってきた。この面で、日本のインバウンド研究において、インバウンド側の声が反映されていない現状を打開し、真の問題解決に繋がることが期待される。

④人類学の基本的な研究方法であるフィールドワークを重視している。理論の応用と実際のフィールドワークの中で見た内容が一致しない場合にも、問題を明確化し、しっかりと学術的ポイントへと変えていった。一つ一つ重なった、異なるフィールドワークでみた違う

景色があるからこそ、本博論としての高いオリジナリティの実現ができたと言える。

口頭試問において主査・副査から以下のような指摘があった。

一に、論文の中のキーワードである「見る」、「見られる」に関して、人類学の演出研究の視角から、「見せる」というキーワードが欠如していること、二に、論文の中の学術用語の説明が不十分な点があり、「ホスト」と「ゲスト」の定義や使用範囲などをもっと明確にする必要があること、三に、論文構成の各章の連結、関係性に関して、もう少し丁寧な説明が必要であること、四に、社会学の観点から、日本を訪れるヨーロッパの外国人観光客への調査も行い、比較の視点が必要であること、五に、先行研究の部分に関して、インバウンドに集中して説明されており、まなざし論や応用された文化人類学、社会学の先行研究についての言及がやや不足している。また、学術用語として確立されていない用語の使用については、なお議論する余地があること等である。

本論文は、以上の指摘のように不十分な点はあるものの、課程博士学位請求論文として一定の水準に到達していると判断できる。口頭試問当日は、主査・副査による質疑に対しても、適切に応答した。よって審査委員会は本論文を博士学位授与に値すると判断した。